

「外国語学習のめやすーロシア語教育用」を用いた 第2外国語の授業実践 ーロシア語でプレゼンしてみようー

山本 有希*

Standards for Foreign Language Learning in a Russian as a second foreign language classroom.
-Let's make a presentation in Russian-

YAMAMOTO Yuki*

This paper is a report of a class based using “Standards for Foreign Language Learning for Russian education use” (hereinafter, "Russian education use")

“Standards for Foreign Language Learning.” (hereinafter, “Standards”) was published in 2012 by The Japan Forum. This was proposed as a learning guidance on learning Chinese and Korean in a high school. “Standards” proposes that a learner communicates with a native speaker by a learning language, and the teacher adjusts to interest and the will of the learner in the class. “Russian education use” was published in 2016 by researchers addressing this problem.

Russian learners in TNCT do not have chances to speak Russian. So, it is difficult to maintain motivation in learning Russian. I obtained an opportunity to practice a class plan based on the idea of “Russian education use”, I tried the verity of the effects of the “Russian education use” in the International business class.

And the results are reported in the following paper. Teaching based on “Russian education use” is effective for creating interest and motivation in the subject. In addition, in order to realize “Russian education use”, an education skill is required.

キーワード:外国語学習のめやす、ロシア語学習

1. はじめに

英語以外の外国語を学習する動機や目的はさまざまである。本校国際ビジネス学科では、日本海に面しているという地域性に鑑み、ロシア語、中国語、韓国語から1言語を選択し、第2外国語として5年間学習機会が学生に与えられている。本校のロシア語クラスでは、最初は学習意欲が高いものの、学習が進み難易度が上がるにつれ、学習意欲を著しく低下させてしまう学習者が存在する。

この学習意欲低下の理由として、教室以外ではロシア語を使う機会がほぼ無いこと、そして将来的にもそれほど期待できないことが考えられる。富山県は1992年にロシア沿海州と友好提携を締結し、文化的・経済的交流を続けている。そんな地にあっても、授業で覚えた表現をロシア人に話しかける機会は極めて少ない。実用性を意識できないため、苦勞して教科書の表現を覚えても、試験が終われば忘れてしまうということを繰り返す。この状況を変えたいと試行錯誤を続けていたところ、「外国語学習のめやすーロシア語教育用」⁽¹⁾ (以下、「めやす」)の研修会に参加する機会を得た。研修において出会った「めやす」では実に多岐にわたる提言があるが、特に注目したのは、「めやす」において「総合的コミュニケーション能力の獲得を学習

* 一般教養科

e-mail:yamamoto@nc-toyama.ac.jp

目標におき、「学習者にとって意味のある、内容を伴ったコミュニケーション行動であることを重視」していることである。実際にロシア人と交流する機会に恵まれなくても、自分の関心や興味のある話題について発信することは可能であり、学習する意味を実感できると思われた。研修の事後課題として「めやす」に基づいた授業実践が課されたのを好機として、本校国際ビジネス学科の授業において実施することにした。本稿はこの「めやす」に基づいた授業実践および今後の課題についての報告である。

2. 授業実施対象とスケジュール

実施するクラスとして、国際ビジネス学科1年生のロシア語クラス(13名)を選び、平成15年10月22日～平成16年1月18日の期間に45分×8回の授業を実施した。実施当時、対象学生達のロシア語学習歴は実質3ヶ月程度であった。一回の授業時間は90分なので、前半は前期から継続している教科書に沿った学習時間、後半は「めやす」に基づいた授業実践に充てた。学生には、班で発表原稿を作成し、最終回にはロシア人講師に対してプレゼンテーションをするという課題を課した。

全8回のうち前半の3回では、自己紹介や基本的な表現を全員で学習し、4回目の授業でプレゼンテーションのテーマと担当する班を決めた。後期中間試験の終了後、具体的なグループワークに入った。第5回～6回でプレゼンテーション用の原稿を作成し、第7回ではリハーサルとしてプレゼンテーションを発表した。そして冬休み明けの第8回授業において、ロシア人講師を前にしたプレゼンテーションの発表を実施した。

3. 授業実施

3.1 教案作成における留意点

教案作成にあたり、「めやす」の内容の中で特に重視したのは、バックヤードデザインとルーブリックである。バックヤードデザインとは、あらか

じめ設定したゴールから、逆算して教案を作成する手法である。今回のゴールは、ロシア人講師に対して、パワーポイントファイルで作成したプレゼンテーションを発表するというものである。ロシア語を用いた情報発信としては一方的なコミュニケーションではあるが、実際にロシア人に対して発表するという設定が重要なポイントであった。

発表原稿は学生自身が作成することが望ましいが、学習レベルの問題から今回は教員が最低限必要と考えられる表現を与え、発表する表現も最小限にとどめさせた。同時に、教科書の学習事項とリンクするように配慮した。また、可能な限り振り返りの機会を設けるとともに、発表に際しては自己評価と相互評価を実施することで、自己の学習態度に対する内省を促すことに留意した。

3.2 発表原稿とプレゼンテーションファイルの作成

発表テーマは、「わが町・わが学校紹介」という課題に則り、本校所在地である射水市、学校の様子や制服、時間割、休み時間の過ごし方、学校行事、学生寮の6つに絞られ、各テーマに必要な表現を全員で学習しながら担当テーマを決めた。原稿の作成には予想外に時間がかかり、原稿の仕上げやプレゼンテーションファイルの作成は宿題として課し、提出させた。

プレゼンテーションは当初3分間の予定だったが、学生の負荷が大きかったため、途中で時間制限を無くした。結果的に多くの班が1分程度の発表となったが、初めての試みであり、無理をさせるべきではないと判断した。

3.3 プレゼンテーション発表

プレゼンテーションの発表では、予行と本番ともに自己評価と班単位の相互評価を実施した。発表する側も聞く側も、まじめに取り組む姿が見られ、学生にとって有益であった。一方で、初めてのロシア人講師との対面に、全員がひどく緊張してしまったのは、無理からぬこととはいえ残念だった。

自己評価と相互評価の結果は全て本人にフィー

ドバックした。相互評価については、提出されたシートを教員がまとめ、記入者がわからない状態にした上で班に渡した。

3.4 教員による評価と学生の事後アンケート

発表に際しては、ロシア人講師にループリックによる評価を依頼した。原稿の表現の大部分が与えられたものであることを考慮し、評価の対象を発表態度やパワーポイントファイルの出来映えに限定した。なおループリックは、文末の表4に示した。

学生に対しては、後日事後アンケートを実施した。これは今回の授業を通して、学生達の興味・関心や、能力についての意識の変化を、1点：かなり下降、2点：少し下降、3点：変化無し、4点：少し上昇、5点：かなり上昇の5段階で尋ねたものである。以下、表1に示した。

表1 事後アンケート項目別平均値

項目別集計	内容	平均
興味 関心	Q1 ロシアに対する興味・関心	4.5
	Q2 ロシア語に対する興味・関心	4.2
	Q3 ロシア人との交流への興味・関心	4.5
言語運用 能力	Q4 ロシア語を話す力	4.1
	Q5 ロシア語を書く力	3.6
	Q6 ロシア語を聞く力	3.8
	Q7 ロシア語の発音への意識	4.1
発表	Q8 人の前で話す力	3.9
	Q9 理解してもらるように話す工夫	4.1
	Q10 聞く人のことを考える力	4.1
情報収集 資料作成	Q11 伝えたい事柄についての情報収集ができる力	3.6
	Q12 伝えたい事柄についてスライドを作成する力	3.6
協同作業	Q13 積極的に意見を出す気持ち	4.1
	Q14 建設的な意見を出す気持ち	3.8
評価	Q15 自分の作品を評価する力	3.5
	Q16 他者の作品を評価する力	4.1
	Q17 他者の評価を受け入れる力	4.2
	Q18 他者の助言を受け入れる力	4.2

4. 分析と考察

4.1 問題点

実施にあたっては、さまざまな問題点が露呈した。まず、教員が与えた表現が、学習レベルと比較して難易度が高くなってしまったことが上げられる。振り返りシートには「表現が難しく、覚えること

が多すぎて大変である」という内容の感想が散見され、学生が感じる負荷が大きかったことが伺える。また、3-2でも述べたように、原稿作成に時間がかかったり、プレゼンテーションの発表時間を縮小せざるを得なかったりしたことは、教員が対象者の学習レベルを正しく認識できていなかったことが原因であると考えられる。

4.2 事後アンケート結果と教員による評価の比較

事後アンケートは、全18問の問いで1)興味・関心、2)言語運用能力、3)発表態度、4)情報収集・資料作成、5)協同作業、6)評価についての意識の変化を尋ねたものである。事後アンケートの全項目の平均値と、教員による個人評価の比較を表2に示した。

表2 事後アンケートと教員による評価の比較

対象者	事後アンケート 個人平均 (5点)	教員の評価 (個人:12点)
S1	4.2	10
S2	3.8	10
S3	3.5	10
S4	3.7	12
S5	4.2	12
S6	3.6	10
S7	4.0	10
S8	4.6	10
S9	3.8	10
S10	4.2	10
S11	3.8	12
S12	4.6	10
S13	3.9	12

全項目の平均値は4.0であり、全体としては上記6分野について少しは向上したという意識を持ったと言える。これはプレゼンテーションを目標に授業に取り組んだ結果であり、「めやす」を用いた授業が有効であったことを示している。同様にロシアに対する興味や関心が高まったことは、学習意欲の向上にもつながるものと期待できる。

一方で個人別の全項目の平均値には差があり、最低値が3.5、最高値が4.6というばらつきが出た。同じ発表を行った班の間でも、学生間の差が0.8という班もあり、感じ方は個々でかなり差があることがわかる。

この事後アンケートは意識調査であり、授業中に実施した自己評価とは同一視できないが、自分なりにうまくいった点、うまくいかなかった点に対する感じ方が現れているので、自己評価に準ずるものとして捉えることができると考えられる。この観点から、事後アンケートと教員による評価を比較してみたところ、興味深い結果が得られた。

第1点は、教員の評価が高いのにもかかわらず、自分自身では能力の向上を実感できないケースである。表ではS4、S11、S13がこれに該当する。これは謙虚さの表れとも自尊感情の低さとも考えられ、このような学習者にとって、自己評価が有用な影響を与えるのだろうかという疑問が生じる。対応策としては、教員の評価を的確に伝えることで、自分の能力を客観視できるよう指導していくことが重要であると考えられる。

第2点は、逆に教員の評価は高くないが、自分自身の意識としては、能力の向上を強く感じているというケースである。前向きな捉え方ができるのは長所だが、客観的な評価を受け入れなければ能力の向上は難しいだろう。この2点は、「めやす」の提言どおり、的確なフィードバックが重要であることを示している。

また、今回は学習効果を測るためにアンケートを用いたが、設問がもう少し具体的であったら、より深く分析できたと思われる。アンケートの記述については今後の課題としたい。

4.3 学生の感想

プレゼンテーション発表の次の時間に、学生に感想文を書かせた。適宜語句を整え、重複した意見をまとめたものを表3に示した。

感想は多岐にわたっているが、プレゼンテーションそのものについて否定的な記述はなかった。それどころか「再チャレンジ」や「成長」などの記述が散見され、それぞれに反省事項はあるものの、全体としてはプレゼンテーションに取り組んで良かったと感じていることがわかる。自分自身の成長を感じ、再度挑戦してみたいという気持ちを持つことは、今後の学習において大きなモチベ

ーションとなることが期待できる。学生たちに新たなプレゼンテーションの機会を与えることを目標とし、よりよい授業計画を作成していきたい。

表3 学生の感想

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・緊張したが、楽しかった。 ・ロシア語で自分たちの町を紹介でき、成長したと思った。 ・まだ完ぺきではないのでもう1度やりたい。 ・もっと練習して完璧に覚えたい。 ・文を増やした分をきちんと覚えられなかった。 ・途中で詰まってしまったのが悔しい。 ・英語より難しかった。 ・また同じトピックでやってみたい。 ・1人でやるなど、いろいろなチャレンジをしてみたい。 ・笑顔で話せるようになりたい。 ・緊張したが、今出せる力を精一杯出すことができたと思う。 ・再チャレンジをして、もっと上手にできるようになりたいと思う。 ・焦って早口になってしまったのは良くなかった。 ・次は落ち着いてゆっくり話せるように自信を持ってやりたい。 ・他のペアの発表を見て、発音などについて改めて考えるきっかけになった。 ・人の(発表)を見ると気付くこともたくさんあって自分を気をつけようと思えたいい機会だった。 ・(予行よりも)緊張は軽かったが、声が小さかった。 ・パワーポイントの操作ミスによる動揺を隠せていたと思う。 ・(ペアの相方が)優秀だったので、プレッシャーが大きかった。 ・カメラに視線を向けることが苦手なので、苦行だった。 ・(表現を)思い出すことに集中しすぎて、笑顔が足りなかった。 ・リベンジチャンスがほしい。 ・(予行よりも)スラスラ言えてよかった。 ・次は自分の調べたいことでやりたい。 ・大変だったけど、よい経験になったと思う。 ・人の前で話すのが苦手なので、良い練習になった。 ・(ペアの相方と)2人で練習したのが楽しかった。 ・緊張した。 ・日本語でプレゼンするより新鮮で楽しかった。 ・(予行よりは)うまくできたので楽しかった。 |
|---|

5. おわりに

「めやす」に基づいて授業案を作成して授業を実践したつもりだが、すべてをカバーできたわけではなく、むしろ不完全な模倣に過ぎなかったのではないかと反省すべき点は多々ある。「めやす」が示唆する内容は広く深く、使いこなすためには教員側のスキルが求められることを痛感した。今回の経験を踏まえ、今後も授業改善に取り組んでいきたい。

表4 評価ルーブリック「わが町、わが学校紹介プレゼンテーション」(個人評価)

	目標以上に達成(4点)	目標を達成(3点)	目標達成まであと少し(2点)	目標達成まで努力が必要(1点)
暗記度	十分に暗記しており、聞き手に語りかけている	メモ等に頼ることなく発表できる	時々、メモ等を見ないと発表できない	常にメモ等を見ながら発表している
パフォーマンス アイ・コンタクト	下や横を向くことなく、常にアイ・コンタクトをとっている	頻繁にアイ・コンタクトをとっている	アイ・コンタクトをとっているが、下や横を向くことが多い	アイ・コンタクトがほとんどない
パフォーマンス 声の大きさ わかりやすさ	はっきりとした大きな声であり、話し方など全てがわかりやすい	声の大きさ、明瞭さがあり、話し方が適切である	声の大きさや明瞭さにやや欠ける所があり、話し方などに改善すべき点がある	声が小さく、聞き取りづらい話し方などに改善すべき点が多々ある

引用文献

* 本稿は、日本ロシア語研究会東日本地区研究例会(2016年6月18日、慶應義塾大学)における報告を加筆・修正したものである。

(1) 公益財団法人国際文化フォーラム、林田理恵科研プロジェクト、横井幸子科研プロジェクト、「外国語教育のめやすーロシア語教育用」 37,42 (2016)

